

令和3年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立岐阜特別支援学校

学校番号	102
------	-----

学校教育目標	<p>聴覚に障がいのある幼児児童生徒一人一人の可能性を最大限に伸ばし、自立と社会参加ができるよう、「生きる力」を育む。</p> <p>○コミュニケーション能力を身に付け、主体的に学び、判断・行動し、問題を解決できる力を育成する。</p> <p>○健やかな体と自他を尊重する豊かな心を育成する。</p>
評価する領域・分野	学校経営方針、各部の教育活動・学習指導
現状及びアンケートの結果分析等	<p>保護者アンケートからは、「教材・教具が準備されている。」「懇談が十分行に実施されている」「職員は、礼儀正しく、親切で親しみがもてる。」の項目に、肯定的な回答をいただいた。また、授業参観後のアンケートでも、授業内容について、高評価をいただいた。しかし、「交流を積極的に取り組んでいる。」については、コロナ禍ということも要因のひとつであると思われるが、昨年度から評価が低いままである。こうした状況を改善するためにも、今後も、保護者への情報発信の仕方を考えていきたい。</p>
今年度の具体的かつ明確な重点目標	<p>①幼児児童生徒一人一人の障がいの状況や、教育的ニーズに応じた合理的配慮の提供に努めるとともに、個に応じた特別支援教育を推進する。</p> <p>②教員の資質、専門性と指導力の向上を図るとともに、聴覚障がい教育に係る専門性の向上に努め教育実践に生かす。</p> <p>③障がいに配慮した教育環境の整備や保護者及び関係機関との連携に努め、安心・安全で信頼される学校づくりを推進する。</p>
重点目標を達成するための校内組織体制	<p>①支援センター部、コア・ティーチャー養成研修事業による支援の推進 ICT推進委員会等による教育環境の整備</p> <p>②研修部による職員研修の推進</p> <p>③担任との保護者懇談、主事による学部懇談の実施、支援センターによる地域への啓発活動</p>
目標の達成に必要な具体的取組	<p>①その場に応じた言葉を身に付け活用できるように、個に応じたコミュニケーション手段（手話、音声、指文字等）を生かし、教科指導全体を通して言語活動の充実を図り、言語能力を育成する。また、ICTの活用を推進し、自分の知りたい情報を獲得し、活用できる力や、情報をまとめ、積極的に発信できる力を育てる。</p> <p>②聴覚障がい教育における専門性を身に付けるとともに、豊かな人間性と幅広い知見を身に付け、教師としての資質向上を図るための研修を計画的、組織的に推進する。</p> <p>③担任との保護者懇談、主事による学部懇談の実施、支援センターによる地域への啓発活動を通して、保護者及び関係機関との連携を深めていくようにする。</p>
達成度の判断・判定基準あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> ・発達段階に応じて他者と積極的に関わることができるよう、自己理解を深めたり、自分なりの表現で思いを伝えたり他者の話を聞いたりすることができる力を育む指導・支援が行われているか。 ・外部評価や自己評価を学校経営の改善に生かし、積極的な情報発信により、開かれた学校づくりを推進できているか。
取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> ・手話、音声、指文字等を用いてのコミュニケーション手段を積極的に活用させるとともに、発音、発語指導を充実させ、自分に合ったコミュニケーション能力獲得の支援の工夫を行った。 ・幼児児童生徒一人一人の生きる力を育むことを目指し、「自立活動の内容」

	<p>を踏まえた授業や指導・支援の改善に向けて全校研究を推進した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器・書籍等の視覚を主とする情報媒体を適切に活用し、情報社会に対応した豊かな生活をつくりだす力を育てるための授業実践に取り組んだ。 ・学校だよりや各部での学級・学年通信等を発行し、保護者への情報発信に努めた。また、地域の方や聾学校に関心のある方に、聾学校を理解していただくために、地域手話講座や学習会を計画、実施した。 ・創立90周年記念事業として、地域の方や学校へご尽力いただいた方へ感謝状を贈呈し、コミュニケーションや繋がりやの深まりとすることができた。
--	---

【自己評価】

評価の視点	評価
①学校教育目標に基づいた教育活動を計画・実施できたか。	A (B) C D
②各部ごとに特色ある教育活動を展開できたか。	(A) B C D
③個に応じたコミュニケーション手段（手話、音声、指文字等）を生かし、幼児児童生徒が生き生きと活動できていたか。	(A) B C D
④積極的な情報発信により、開かれた学校づくりが推進できたか。	A (B) C D
成果・課題	総合評価
<ul style="list-style-type: none"> ○各部ごとに、幼児児童生徒の発達段階や個々の実態に応じた教育活動を実施し、指導・支援について保護者の理解を得られている。 ○コロナ禍の中でも、保護者懇談、学部懇談、地域への啓発活動の内容を工夫し、学校への理解をしていただけるように努めることができた。 ▲聴覚障がい教育の専門性向上のための取組を行っていることを、保護者の方に理解していただけるよう、情報発信の方法を再考する必要がある。 	A (B) C D
来年度に向けての改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍のため、学校の様子が見えにくくなっている今、ホームページや学校だより等を活用しながら、開かれた学校づくりに取り組んでいく。 ・保護者が期待する聴覚障がい教育の専門性の向上や、教師としての資質向上を目指し、一人一人が自己研修や授業改善に取り組んでいく。 ・教員が身に付けた専門性を保護者と情報共有できる場を積極的に設け、コミュニケーション能力や学力の向上等、個に応じた指導・支援に努めていく。

【学校関係者評価】 意見・要望・評価等 （令和4年2月実施）

<ul style="list-style-type: none"> ・長引くコロナの影響で、教育活動の工夫に苦慮されていることと思います。聴覚障がい者のコミュニケーションについて、社会的な注目が集まったこの機会を利用して、情報発信を期待します。 ・コロナ禍の中であってもできる方法を模索し、実施したことは高く評価できる。 ・ICT普及により、教員一人一人の負担が増えていないか心配。教員間でフォローし合える環境を作ってほしい。特に聾学校は幼稚部から高等部まで4つの部があるが、それぞれが互いにフォローできると良い。 ・校外学習では教員ではなく手話通訳者を利用することを検討してほしい。将来（子どもたちに）、手話通訳者が必要となった時、どのような流れで派遣できえるのかを知り、訪問先の人も手話通訳者の存在を知ることになる。 ・長い歴史ある岐阜聾学校は、聴覚障がい教育の中核であり、支援センターとしての役割も担っている。最新の機器やICT環境が整った校舎に建て替える時期が来ているのではないかと。教育委員会への要望に、学校運営協議会、地域（県内すべての地域）も協力していけると良い。 ・幼稚部と幼稚園同士の交流はもちろんのこと、市教研のメンバーにも入っていただき、一緒に研究・研修し、学べると良い。幼児教育と障がい児教育の両方の視点をもって、今後も学び合いを深めていけることを願う。 ・コロナ禍においても様々な取り組みが行われていた。体験学習や校外学習等、子どもたちの感想を見
--

でも、実際に目で見ることの重要性を感じた。

- コロナ禍においても、工夫次第で課題等を達成されたこと、成果が随所に見られた。情報発信は、学校だよりだけでなく学級通信をまめに出すことにより、子どもたちの良いところがよくわかる。社会に出ていくためには、外部の人との交流が多く必要だと思う。
- 教育目標達成のため、尽力されていることが、報告書から理解できた。児童生徒に完璧を要求することは難しいが、より良き将来のために、これからも尽力してほしい。
- 子供同士のコミュニケーション能力が下がっている。相手を理解しないで済ませることも多い。学校より、家庭での指導が足りないのではないか。子どもの悪いところを叱ることができない親もいる。コロナ禍なので子ども同士のコミュニケーションの機会が少ないので、校内でオンラインを活用しても、いいかもしれない。